



大阪の 社会福祉

2023年3月

814



社会福祉法 大阪市社会福祉協議会

<https://www.osaka-sishakyo.jp>



▲シンポジウム登壇者の(左から)木村泰子さん、石田易司さん、川崎大介さん、南多恵子さん



市社協

こどもたちが自分らしく
生きるために
「ヤングケアラー」について

知る・学ぶ・理解する

大阪市ボランティア・市民活動センター(市社協)は、1月29日に地域こども支援ネットワーク事業シンポジウム(地域福祉シンポジウム合同開催)として、「こどもたちが自分らしく

生きるために「ヤングケアラー」について知る・学ぶ・理解する」を開催しました。会場、オンラインあわせて129人が参加しました。

(2面につづく)

HB

まだまだコロナ感染が収まったわけではないのに、こんなに入出があつて大丈夫だろうかと思ひながら、駅で人を待っていた▼通り過ぎる人波をぼんやりみていると、マスクで顔を半分隠すと、多くの人が美男美女に見える。昔の人が言った「夜目遠目傘の内」は正しい▼そんな時、一人の女性から声をかけられた。「帰りの電車賃がないので、500円だけいただけませんか」。服装もちゃんとしているし、髪もきれいにセットされている。そんな人が見知らぬ私にお金を頂戴といえる勇氣はすごい▼しかし「そこに交番があるから」と言ったら、そそくさと去って行った。自分のことを嫌な奴だなどと思ひながら、やっぱり嘘だったんだと思つた▼昔は、本当にお金がありませんという服装の人が集めていた収集日のアルミ缶も、今では普通の服装の人が集めている。フードパントリーや炊き出しにも、たくさんの人が普通に列をなしている。不況が進んで、貧困が当たり前になっている▼コロナ、円安、物価高、戦争など世間は暗い話であふれている。半分でもいい、マスクで隠してくれないだろうか。

(石)



「子どもたちが自分らしく生きるために 『ヤングケアラー』について 知る・学ぶ・理解する」

近年、社会の関心が高まっている「ヤングケアラー」について、地域全体で学び理解を深める機会となるよう、シンポジウムでは、市立大空小学校・初代校長の木村泰子さん、NPO法人ふうせんの会（3面に掲載）で活動する川崎大介さんの講演や、パネルディスカッションを通じて、思いや気づきを共有しました。

人は変えられなくとも自分も 変えられる

木村さんは、自身の教員生活のなかで出会ってきた子どもたちから教わり学んできた経験をもとに、大人が変わらなければ子どもが安心して過ごすことはできないことを伝えました。子どもたちとの関わりはなかで、何度も自分自身を問い直したという木村さん。まずは大人たちが、自分たちの限界や失敗を認め、どんなふうに関わり直しができるか、「人を変えることができる」とも「自分を変えることができる」とメッセージを送りました。



ただ話を きいてほしい

川崎さんは、小学生のころから祖母の介護や病気がちな母親のケアを担っていたヤングケアラーとしての経験を語りました。介護や家事があるのでクラブには入らなかったこと、家を空けることが不安で修学旅行に行かなかったこと、ケアを担っていることを周囲に話せなかったこと、学校卒業後の進路もケアを第一に考えたこと、ケアが終わった時に社会との接点がなくなったように感じたことなど、まっすぐに穏やかな口調で話しました。



私にできること ある？

参加者からの「周りの人がヤングケアラーの方にできる手伝いはどんなことですか？」という質問には、「まずはただ話をきいてほしい。声をかけることから関係を築くことで、困っていることを話せるようになるのでは」と答えました。

パネルディスカッションでは、桃山学院大学名誉教授で地

域子ども支援ネットワーク事業運営協議会代表の石田易司さんの進行のもと、意見交換がおこなわれました。

NPO法人ふうせんの会・事務局長の南多恵子さんは、ふうせんの会の活動や会に参加するヤングケアラー・若者ケアラーの言葉を紹介し、同じ気持ちや体験を持った仲間との出会いの大切さを伝えました。

木村さんは、「大丈夫？今何に困っている？私にできることある？」と、周りの大人がそんな言葉かけができる社会になることに期待を寄せました。

川崎さんは、近隣の方がテレビを観て「もしかしてヤングケ



▲「子どもが子どもとして生きている時間を保証すること」と木村さん



▲川崎さんの温かな語り口が参加者の心に響きました

「アラ―では？」と気づいてくれたことからふうせんの会に出会い、今ではふうせんの会に参加することが普段の生活の励みになっていると話し、「ヤングケアラーの存在に気づいたら、福祉関係者につないでほしい。誰でもいいので話せる先があってほしい」と伝えました。

石田さんは最後に、「他人事にしない、自分事にする」ことが必要と話し、小中学生の時は自宅以外にほっとできるような場、高校生になればキャリアをサポートする場など、学校や地域だけでなく企業も含め、社会全体で考えることができればと締めくくりました。

西成区

社会福祉施設が ヤングケアラー について研修会

西成区では、区内の社会福祉施設が集まった社会福祉施設連絡会で、「ヤングケアラー・若者ケアラーを知る」と題した研修会を実施しました。ふうせんの会の南多恵子さん、喜多正輝さんを講師に招き、会場、オンラインあわせて約20人が参加しました。

研修会では、まずヤングケアラーの概要や現状について教えていただきました。ヤングケアラーだけではなく、若者ケアラーと呼ばれる概ね18歳〜30歳程度のケアラーについてもふれられ、若者ケアラーは大人だから大丈夫と思われやすく周囲の理解も得にくいことがあることも伝えられました。

その後、喜多さんから若者ケアラーだった当時、どのような気持ちで過ごし、どのような方法で支援につながったかの体験が話され、支援者の方に向けて「声をかけてもらえれば」というメッセージが伝えられました。

講演後、参加者同士で福祉職の立場からできることについて意見交換をおこないました。そ

登場していた

「ふうせんの会」についてご紹介

特定非営利活動法人ふうせんの会は、ヤングケアラーや若者ケアラーが安心して交流できる場をつくり、彼らが夢をもって自分らしく生きていけるような社会を作るために活動している団体です。

家族のケアを担っていたり、かつて担っていたことも、若者や、ヤングケアラーに関わる専門職が集まってできた約20人のメンバーで運営している団体で、令和元年12月から任意団体として活動を始め、令和4年2月にNPO法人を設立しました。令和4年8月からは大阪市ヤングケアラーへの寄り添い型相談支援事業を受託し、中高生のヤングケアラーに向けた取組みもしています。

ケアをしている状況が悪いというわけではなく、社会のサポートを暮らしにプラスすることで、少しでも負担を軽減したり、進路の選択肢の幅を広げることにつながるように活動しています。そして、家と学校以外のコミュニティになれたらと考えています。

今すぐに相談したいことがなくても、早めに相談先とつな

がっておくことで、困ったときすぐに支援につながるができます。学校の先生から心配な生徒について相談を受けて、学校を訪問することもあります。「もしかしらたらヤングケアラーかも」「ひとりで抱え込んで悩んでいるかも」と周囲の人が気づきの視点をもって、適切な相談先につなげることも大切です。

費用
無料

活動紹介 (大阪市ヤングケアラーへの寄り添い型相談支援事業)

YCピアサポ相談

家族のケアをしていたスタッフ（ピアスタッフ）や社会福祉士等の専門職が、相談に乗り、一緒に考えます。介護保険制度や障がい福祉、保育サービス、経済的支援、学習支援など、役に立つ制度やサービスについてお伝えします。書類作成の手伝いや役所の窓口へ同行支援もしています。

相談方法 対面、オンライン（ZOOM）、電話

会館時間 平日 午前10時から午後6時

※メール (pia_osakacity@ycballoon.org)、LINE、Twitterで、相談したい日時をご連絡ください

大阪市中高校生オンラインサロン

中高生ヤングケアラーたちが集まり、「ひとりじゃない」「自分だけじゃない」と思える居場所。中高生ヤングケアラーたちが交流する場です。

オンラインサロンでは、同じように家族のお手伝いをしていたり、少し悩んでいたたりする中高生が集まっておしゃべりをします。他の人の話を聞いたり、自分のことを話すことでこころの整理ができるかもしれません。

聞くだけの参加や、ニックネームでの参加、画面をオフにしての参加もOKです。



▲相談室のようす



▲つどいのようす

その他、ふうせんの会活動

● つどい

現役または以前ケアをしていた方が集まり、ケア経験の共有やフリートークをする場を設けています。

● ふうせんカフェ

「学生ヤングケアラー」「元ヤングケアラーで現在支援職の人」など、毎回テーマや参加者を決めて話すオンラインのおしゃべり会なども実施しています。



▲ふうせんの会スタッフのみなさん

特定非営利活動法人ふうせんの会

大阪府中央区谷町二丁目2-20 2階
市民活動スクエア CANVAS谷町F09

TEL 06-4790-8881

HP <https://ycballoon.org/index.html>

こちらから
アクセスできます▶



▲「がんばれ」ではなく「大丈夫?」と声をかけてほしいと喜多さん

ここでは、ヤングケアラーや若者ケアラーに相談先の情報を周知することをはじめ、利用者だけでなく、家族にも目を向けて気づきの視点をもつこと、福祉施設だけでなく学校や区役所など他機関でネットワークをつくり、情報を共有していくことの大切さを参加者全員で確認しました。

社会福祉施設の公益的な取り組みの推進

「コロナ禍での調査結果と実践事例から」

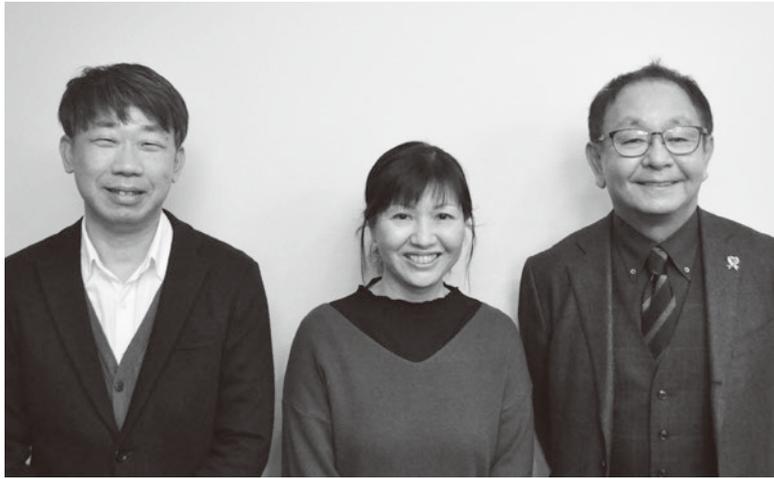
一水会・区社会福祉施設連絡会合同学習会

大阪市社会事業施設協議会（事務局：市社協）では、6団体（児童・保育・高齢・生活保護・地域・障害）の各施設を対象に、（かつて毎月第一水曜日に開催していたことから）「一水会」という学習会を、毎年開催してきました。

近年は大阪市社会事業施設

協議会と市社協による共催で、各区社会福祉施設連絡会（事務局：各区社協）との「合同学習会」と位置づけており、今年度は2月2日にオンラインで開催。各施設や区社協の視聴会場から、施設役員、社協職員ら約200人が参加しました。

平成28年度の社会福祉法の



▲（左から）福島育成園の松本さん、江之子島コスモス苑の村山さん、大阪教育大学の新崎先生

改正で、社会福祉法人の地域における公益的な取り組みが努力義務化され、その後、地域共生社会の実現に向けた施策が展開されるなか、各施設が地域の課題に対して強みを活かした取り組みを推進・発信することがますます重要となっています。一方、各施設では新型コロナウイルス感染症による影響が依然大きく、人と人との

交流を一定制限せざるを得ない状況が続いています。

今回は、昨年度に引き続き大阪教育大学特任教授の新崎国広先生を講師に迎え、市内各施設を対象に令和4年1～5月に実施した公益的な取り組みに関する調査の結果や、江之子島コスモス苑、福島育成園それぞれの実践報告から、各施設が今できること、今後の展開に向けたポイントを学びました。

▼ 四方よしの関係づくり

まず、新崎先生からは、公益的な取り組みを義務化されたから取り組むのではなく、地域と施設が協働すること、力を合わせることが、四方よしの関係になるというお話がありました。四方よしとは、利用者、施設、地域、そこで活躍するボランティア全員のメリットになるということです。

例えば、利用者のよしとは地域の方やボランティアと関わることによって生活の質が高まること。施設のよしとは地域から知られることで利用しやすく

実践報告①（西区）

コロナ禍における高齢者施設でのこども食堂の立上げ・運営

令和4年9月から特別養護老人ホームとケアハウス2施設のスペースでこども食堂を開催しています。当初は集まって食べられたらと考えていましたが、コロナ禍で難しかったためテイクアウトでにおにぎり2個と汁物を提供しています。LINEを活用して周知し、完全予約制にしています。

もともと地域の住民を対象にいきいき百歳体操やカラオケをしていて、高齢者には施設の存在が広まっていきましたが、その他のこどもや親世代に知ってもらう機会になればと考え、実施しました。コロナ禍で慎重な意見もありましたが、行事が制限されたコロナ禍だからこそ準備時間を確保でき、必要な準備や人員も最低限で始められると考え、思い立ったら吉日と行動に移しました。

近隣のスーパーやさまざまな企業と関係を構築し、食材提供いただいています。開催しているつながりのなかで、お金や食材を寄附していただくこともあります。

今後の展望として、法人内の他施設での3つ目のこども食堂の開設や、こどもから高齢者まで世代を越えて一緒に食べるような時間ができればと考えています。



社会福祉法人亀望会
特別養護老人ホーム江之子島コスモス苑
村山 直子さん（管理栄養士）

なったり、施設利用者への偏見をなくしていくこと。地域のよしとは、身近なところに施設があることで相談をしたり、福祉情報を手に入れやすくなったりすること。ボランティアにとっては、健康づくりや生きがいづくりになることなどが挙げられます。ボランティアをすることで社会とつながることを視野に入れながら、施設職員や社協職員にはコーディネーターとしての役割をお願いできればと話しました。

▼「コロナ禍だからこそ」を活かして

2つの実践報告を聞いたのち、新崎先生からは、ほかの施設でも活かせるポイントとして、「コロナ禍だからできないではなく、「コロナ禍だからこそ」を活かして目的をもって柔軟に取り組む」「施設の利用者と住民が交流することで、相互理解のきっかけにする」、「ボランティアとして参加してもらったり、小中学生に福祉教育をすることが福祉のおもしろさにもつながる機会となり福祉の人材確保にもつながる」「施設内だけでがんばるのではなく、区社協と連携し、企業・学校などと協働するなど、助け上手・助けられ上手になる」ことがあげられました。結びとして、それ

ぞれの施設で感染リスクなどの課題や制約もあるなかで「自分たちの施設ではどのようなことが大切で、それをおこなっていくためにどのようなビジョンを描くかを考えたうえで取り組んでいくかが重要」と締めくくりました。

▼できることをできる形で

参加者からは、「一人でがんばるのではなく専門性を活かしたり、手を差し伸べ合ったりすることの大切さに改めて気づかされました（施設職員／保

育）」「職場の仲間と共有しながら、今後の取組みに活かし、できること」を「できる形」で実現させていきたいと思っています（施設職員／児童）」「新崎先生わたりやすく、現代社会の問題点と、それをちょっとずつ変えていくのは自分たちなのだと思感させられました（施設職員／高齢）」「コロナ禍で意欲的に新たな活動に取り組まれて来られた、お二人の活動報告が本当にすてきですばらしくとても勇気をいただきました（社協職員）」といった声が寄せられました。

調査結果と今後に向けて（市社協職員からの報告）



社会福祉法人
大阪市社会福祉協議会
地域福祉課係長
田淵 章大

- 今後に向けて **3** 社協・社会福祉施設連絡会等との連携・協働
- 施設単独で取り組むには大きな力が必要。一方、社協ではコロナ禍で地域福祉活動の再開支援やICT活用に取り組んできた経過があり、支援・調整の力になれる可能性がある
 - 区社会福祉施設連絡会の機能・ネットワークを有効活用して、新たな取組みを提案・構築していくことも考えられる
（例）「食糧・物品支援」「出張相談会」「福祉教育」「人材育成」「ボランティア受入」などについて、協力・賛同施設を募り、具体的な活動に向けてコーディネートする仕組みをつくる

「地域における公益的な取組みに関する実態調査」の概要は本誌令和5年1月号（8・9面）に掲載しています。



学習会を「映像で見たい」「活用したい」あなたへ

「参加できなかったけれど実践報告を聞いてみたい」「施設内の研修や、区の連絡会などで活用したい」という方のために、学習会の動画を作成中です。市社協・施設協ホームページで3月末頃公開予定です。ご活用ください！



実践報告②（福島区）

障がい者施設でのボランティアとの交流・福祉教育の推進

法人として、障がいのある方が安心して心豊かに過ごせるように地域で共生できることをめざし、設立当初から地域住民との関わりを大切にしてきました。ボランティアの受入れも積極的にしていましたが、コロナ禍で施設での活動が難しくなりました。

そのようななかで福島区社協主催の「おうちでできるボランティア園芸編」に協力することになり、施設のスペースを開放したことで、住民と利用者が交流する機会になりました。コロナ禍でどうにかしなければと感じていたなか、活動の契機になったと感じています。

ほかに、福祉教育に力を入れており、小学校の学区探検として、施設に来てもらっています。また、中学校に出向いて、知的障がいや発達障がいなどを伝える講義をしています。こどもの頃から障がいにもふれ、理解を深めることで、福祉人材の養成にもつながればと思っています。

地域に対しても福祉教育を積極的にすること、地域との窓口としてボランティアを受け入れ、施設と地域のつながりをもっておくことで、地域力を上げていく一助になればと考えています。



社会福祉法人 大阪市手をつなぐ育成会
障害者支援施設 福島育成園
松本 源太郎さん（管理者）

誰もが誰かの

ゲートキーパーになれる 日々の活動が孤立を防ぐ



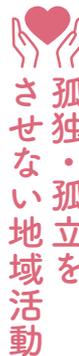
生野区では、1月26日「あなたもゲートキーパーにー悩んでいる人に寄り添い『孤独・孤立』しない地域って？」を開催し、日頃から地域福祉活動などに参加している住民を含めた133人が参加しました。



「命の門番」とは

まずは、NPO法人ゲートキーパーTONARINO理事長の森本美花さんから「ゲートキーパー」とはどのような活動をしているのか、お話がありました。ゲートキーパーとは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応を図ることができる人ということで、「命の門番」ともいわれています。誰も自殺に追い込まれることがない社会の実現

のために、「変化に気づく」「声をかける」「じっくりと耳を傾ける」「支援先につなげる」「温かく見守る」といった気持ちに寄り添うコミュニケーションをとることで、「孤独・孤立させないこと」を目指しています。特別な研修や資格は必要なく、誰でもなることができます。日頃から近所同士で知りあい、気にかけてあげることが、孤独・孤立を防ぐことにつなが



孤独・孤立をさせない地域活動

今回はその視点をふまえて、4地域がそれぞれ取り組んでいる見守り活動について紹介しました。4地域とも共通して、できることをできる範囲で楽しみながらネットワークをつくり、見守りにつなげていることがうかがえました。



▲4地域8人の方が、地域活動の見守りについて発表

て、コロナ禍で区内では以前よりも孤立死が増えているという課題がありました。そうしたなか区社協職員が、地域住民が日頃から取り組んでいる見守り活動がゲートキーパーの活動と共通しているのではないかと考えたことがきっかけで開催に至りました。

講座をふりかえって、区社協・見守り相談室の篠崎ゆう子さんは「長く続くコロナ禍で、地域の活動は大きなダメージを受けました。今回、ゲートキーパー講座が地域の元気につながっていくものになって欲しいという思いで企画しました。日頃の見守り活動がゲートキーパーになり、地域のつながりをつくっているということを参加者みんなで共感できたという手ごたえを感じられたことは、私たちの大きな収穫になりました」と話しました。

4地域の見守り活動（一部抜粋）

北鶴橋地域

10年前に孤立死があったことを受けて名簿を作成。ワークショップを開催し、気になる人のマップングをおこなっています。名簿を活用しての見守り活動は災害時にも役立つと考え、平時から活用しています。

林寺地域

林寺ハロウィンを通じて、いろいろな工夫を凝らしました。子どもも大人も気軽に声をかけあえる地域のつながりができる行事を大切にしています。「大人も子どももわくわくするようなまちづくりへ」

異南地域

「たつなんサンタ大作戦」として、サンタの衣装を着た子どもたちと地域のボランティアが高齢者のお宅を訪問し、子どもたちの手作りメッセージカードやプレゼントを手渡ししています。サンタの衣装は地域のボランティアグループ「きらきら会」の手作りです。

東中川地域

ボランティア委員会を立ち上げ、負担のない範囲でゆるやかな見守りをしています。熱中症対策としてうちに連絡先を記入し見守り訪問時に配付。困りごとを聞いたら相談機関につないでいます。ボランティア委員同士で勉強会を開催し、地域の見守りをすすめています。



▲〇×クイズも交えながら参加者の自殺に対するイメージを確認する森本さん



日頃の活動がゲートキーパー

この講座を開催した背景とし



▲19地域の取組みをパネル展示

善意銀行

—皆さまの善意を大切に—

市社協では、「善意銀行」を通じて皆さまからの善意のご寄附を、施設や団体へ払い出しをおこなったり、助成金として活用させていただくことで、地域福祉の推進などに役立てています。

令和4年11月15日～令和5年2月15日の預託・払出は次のとおりです。

| 物品預託者名 | 預託内容 | 払出先 |
|----------------------------------|------------------------------|-------------|
| OAPタワー (三菱マテリアル株式会社・三菱地所株式会社) | 非常食 (非常用飲料水、マジックライス、もち万年) | 20区社会福祉協議会 |
| 株式会社エトヴォス | 化粧品 | 大阪市児童福祉施設連盟 |
| 安原記念財団 | 400,000円 | 大阪市社会福祉協議会 |
| 株式会社セブンイレブン・イレブン・ジャパン | 食品 | 24区社会福祉協議会 |



▶OAPタワーさんからいただいた非常食をフードパントリーで活用しました(中央区)



令和4年度共同募金のお礼と報告

コロナ禍のなか、令和4年度(第76回)共同募金運動に、府民の皆様の温かいご理解ご協力ならびに関係団体等の並々ならぬご尽力をいただき、ありがとうございます。おかげをもちまして、12月末現在の実績は、別表のとおりとなりました。また、1～3月の期間は、大阪市港区、大阪市住吉区、大阪市平野区、岸和田市、泉大津市、松原市、四條畷市のそれぞれの地域で、テーマ型募金運動を実施中です。

お寄せいただきましたご寄附は、配分委員会、理事会、評議員会で慎重に審議の上、民間社会福祉事業の推進、地域に根ざしたさまざまな福祉活動の支援等に役立ててまいります。

皆様には厚くお礼申し上げますとともに、今後とも共同募金運動の発展に、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

社会福祉法人 大阪府共同募金会



| 地区名 | 令和4年度実績額(円) |
|-----------|-------------|
| 大阪市計 | 144,926,452 |
| 大阪市を除く各市計 | 220,991,807 |
| 町 村 計 | 15,140,023 |
| 本 部 | 24,401,116 |
| 合 計 | 405,459,398 |

| 区 分 | 令和4年度実績額(円) |
|-----------|-------------|
| 戸 別 募 金 | 278,288,912 |
| 法 人 募 金 | 55,861,358 |
| 学 校 募 金 | 9,909,772 |
| 職 域 募 金 | 5,847,108 |
| 街 頭 募 金 | 15,189,803 |
| バ ッ ジ 募 金 | 36,356,500 |
| そ の 他 | 4,005,945 |
| 合 計 | 405,459,398 |
| 目 標 額 | 560,000,000 |
| 達 成 率 | 72.4% |

風をよむ

コロナ禍によって生まれた変化の影響

大阪公立大学大学院 生活科学研究科 講師 鶴浦直子

日本で初めて新型コロナウイルスの感染が確認されてから3年が経過し、令和5年5月8日からは感染症法上の分類が季節性インフルエンザと同じ5類に変更されることとなった。この間、「新しい生活様式」として示された「人との身体的距離をとること」「マスクの着用」「手洗い・手指消毒」はすっかり生活の一部となった。

何十年後かの世界から振り返ったとき、この3年間はどのように評価されるだろうか。とくに3年間のマスク生活は、子どもたちの発達に様々な影響を与えたのではないかと不安視する声がある。乳幼児期は、口の動きと相手が発する音情報とを結びつけて言葉を学んでいく。*表情も、目だけでなく、口の形なども併せて読み取っていく。この経験が制限された3年間は、大人が考える以上の影響を子どもたちに与えているかもしれない。

であろう。若い世代だけでなく、中高年齢層の利用も進んだ。様々な人たちが、自らの日常生活を紹介したり、自分たちの思いを述べたりすることが一層促進されたといえる。当然のことながら、問題を含んでいる場合もあるため、メディアリテラシーを高めていくことが必要となる。また、こうしたメディアがあったとしても、声を挙げる人ができない人々もいるため、多岐にわたる配慮は不可欠である。けれども、誰かが代弁するのではなく、自分自身で発信すること。当事者自身による社会への発信を促進した一つの例と考える。今後、ソーシャルメディアを通じて自分たちの声を社会に届けることは活発になっていくと考える。

コロナ禍によって生まれた変化の影響は、これからの私たちの生活に様々な形で表れてくることになるだろう。

*明和政子(2021)『ヒトの発達の謎を解く』ちくま新書。

ふだんのくらしをささえるしごと

施設職員の声

Part 2

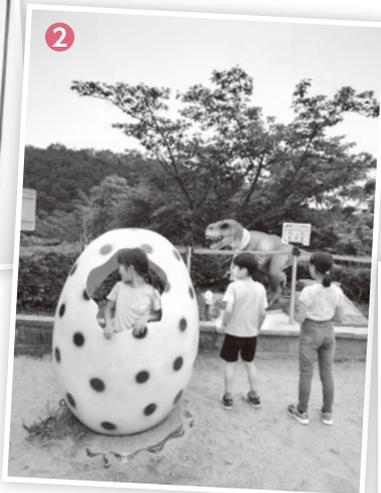
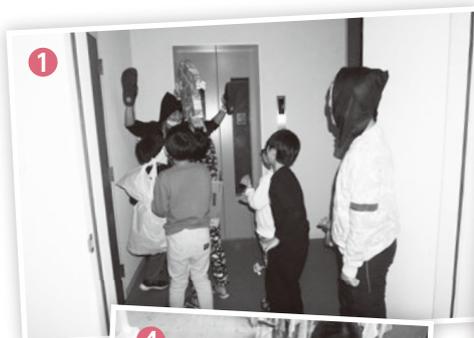
- | | |
|---------------------------|----------|
| ① 高津学園(児童養護施設) | 坂口 知輝さん |
| ② 聖家族の家(児童養護施設) | 菊池 虹香さん |
| ③ 天使虹の園(保育園) | 村上 晴香さん |
| ④ 北田辺保育園 | 近藤 桃夏さん |
| ⑤ 北田辺保育園 | 西岡 実乃里さん |
| ⑥ 救護施設 三徳寮 | 山内 風知さん |
| ⑦ 救護施設 三徳寮 | 新川 愛実さん |
| ⑧ スカイ・アンドロメダ(障害福祉サービス事業所) | 田中 愛さん |

大阪市内には、高齢者、障がい者、こども、生活困窮者などを対象とした社会福祉施設が約1,000か所あり、そこには一人ひとりの暮らしを支える施設職員がいます。「具体的にはどんな仕事?」「やりがいは?」「大変なことは?」など普段なかなか聞けない話を聞いてみました。「福祉を学ぶ学生のための施設職員との懇談会」(令和4年11月開催)に出席した若手職員のうち、昨年度紹介した10人に続き、新たに8人の話を紹介します。

※本記事は、大阪市社会事業施設協議会ホームページとの連動企画です。詳細はホームページからご覧ください。

URL

<https://sisesukyosaka-sishakyo.jp/post-training/fukushigoto-2/>



福祉を学ぶ学生・関心のある学生の方に向けたメッセージとともに仕事のなかでのエピソードや熱意を紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

〈お詫びと訂正〉

本誌2月号(No.813)7面に掲載しました、福島区研修会の参加人数(1段目左から5行目)について、次のとおり訂正し、お詫びいたします。

- 正 区役所職員3人、区社協職員6人(など)の計19人
- ×誤 区役所職員1人、区社協職員7人(など)の計18人

立ちどまらない保険。 MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK



www.ms-ins.com